

『辺境の思想：日本と香港から考える』

福嶋亮大*・張彥啓**著、文藝春秋、2018年

小栗宏太†

香港が大変なことになっているらしい。そう感じさせるようなニュースを耳にする機会が増えた。2014年の雨傘運動以降、香港における民主化運動は、日本でも定期的に注目を集めるようになった。2019年6月に勃発した逃亡犯条例改正案に端を発する抗議運動は、既に半年以上が経過した本書評の執筆時点においても収束の兆しを見せず、連日のように我が国のメディアを賑わせている。

でも実際のところ香港では、何が起きているのだろうか。人々を激しい抗議運動に駆り立てているものは、いったい何なのだろうか。それらの運動について、日本では「民主」や「自由」を旗印にしたものとして報道されているが、果たしてそれだけだろうか。そんな聞こえのいい建前の背後に隠れた若者たちの本音とは、いったいどんなものなのだろうか。文芸評論家の福嶋亮大と、香港生まれの社会学者である張彥啓が2017年に交わした往復書簡から編まれた本書『辺境の思想：日本と香港から考える』は、そんな疑問に答えるであろう一冊である。

雨傘運動が、要求していた普通選挙を勝ちとることができないままに収束した後、香港の若者の一部は旧来の民主派の穏健路線に失望感を抱くようになり、直接行動を辞さず、独立への志向も隠そうとしない「本土派」と呼ばれるグループが支持を集めた。「地を離れず、自分の『ローカル』を大事にする」(32頁)ことを求める本土派は、旧来の民主派のかかげる「民主」や「自由」などの建前を必ずしも重視せず、それらを現実ばなれしたエリート主義的理想論だと嘲笑することすらある。彼らの歯に衣着せぬ物言いには、良くも悪くも現代香港の若者の実感が反映されている。

しかし普遍的価値観に訴える民主派の主張とは異なり、彼らの主張は必然的にローカルな文脈に根ざしたハイコンテクストなものになるため、日本を含めた海外で詳細に取り上げられる機会はあまり多くなかった。本書について第一に注目すべき点は、この本土派の思想が日本の読者に向けて丁寧に解説されていることである。日本文化に精通した張は、本書に収められた書簡の中で、香港ローカル文化の翻訳者としての困難な役割を引き受け、本土派の思想的バックボーンや、彼らが支持を集めた社会的背景について、平易な言葉で語っている。時に生々しい思いも綴られた張の書簡を通じて、読者は、本土派が注目を集めた雨傘後の香港社会の雰囲気垣間見ることができるはずである。

* 立教大学文学部准教授

** 立命館大学国際関係学部准教授

† 東京外国語大学博士後期課程

sasaleut@gmail.com

本土派の思想が香港外に伝わりにくい理由は、ただローカル性のためだけではない。建前を軽蔑する彼らの表現方法は、往々にして広東語のスラングや罵倒語を用いた卑俗なものになるため、既成メディアや学術書との親和性が低いのである。その点、往復書簡という形式をとる本書は、福嶋いわく「ふつうの書籍や論文ではなかなか書くチャンスのない思いつきも気楽に語ろう」（17頁）という思惑のもとに書かれており、形式面でも非エリート的な文化現象の紹介に適していると言える。

ただし、この形式の弊害か全体に議論の展開が早く、個々の事例が駆け足に言及されるに留まっているため、やや正確性を欠く記述も見られる点には不満が残る。例えば福嶋は、「同性愛者であった張国栄（レスリー・チャン）」（43頁）と書いているが、早逝した俳優・歌手のレスリー・チャンは、確かに同性の恋人がいたとされており、性別越境的なパフォーマンスによりゲイ・コミュニティからも支持を得ていたが、明確に自らを同性愛者として表明したことはないため（Leung, 2008: 87）、やや配慮を欠いた表現だと言わざるを得ない。また張は、「椎茸を研究」した「アメリカの人類学者」（101頁）について言及しているが、注で参照されているのは最近邦訳が出版されたアナ・チンの「マツタケ」についての研究である（チン, 2019）。

とはいえ、この自由な形式を活かして、通常の学術書であればとりあげるのが憚られるかもしれない本土派のあけすけなコミュニケーション手法を詳細に取り上げている点は肯定的に評価すべきだろう。例えば、林鄭行政長官の就任を扱った張の書簡では、「粗口」と呼ばれる広東語のスラングが解説されている。これは元来英語のFワードのような性的な意味を持つ卑語であり、公共の場で口にするのは憚られた言葉だったが、昨今の抗議運動では使用が拡大しており、注目すべき文化現象となっている（小栗, 2019）。張の率直な筆致の魅力を伝える箇所なので、長くなるが一部引用したい。

「粗口」や雑言のような言葉は、他人から距離を置く場合にも、あるいは縮める場合にも使われています。（…）セックスを比喻する言葉だからこそ、憎しみも悲しみも表現できるのです。／（…）昔の民主化運動には、「平和・理性・非暴力」のほかに、「非粗口」という暗黙のルールもあって（!）、この四つをあわせた「和理非非」という「デモ四原則」がありました。／（…）しかし、雨傘運動以来、民主派の失敗を受け、この四原則はむしろ緩められました。本土派の支持者の大半を占める若い世代には、むしろ建前ではない本音の気持ちを伝えられる「粗口」こそが格好よく見えるのです。／「粗口」は品性の観点からは確かによくありません。しかし、香港文化や広東語を深く知ろうとするならば、「粗口」を知ることが必要です。（65頁）

福嶋は張について、「張さんにおいては、都会的・国際的・知的であることとオタク的・庶民的・遊戯的であることが矛盾なく同居している」（15頁）と述べているが、このような一見卑俗な社会現象の解説には、まさにそんな清濁併せ呑む社会学者としての態度が生き生きと現れているように思う。

そんな香港の若者の本音を知るのに、日本人々は実は有利な立場にあるのかもしれない。香港といえば、しばしば九龍城などに象徴される雑多な過密都市のイメージで語られ、エキゾチックな他者性ばかりが強調される傾向にあったが、戦後の文化・社会の発展という観点から見ると、実は日本とよく似た点も多いからである。本書の第二の利点は、この類似性に焦点を当てていることである。

本書が目する日本と香港の共通点は、「辺境」としての位置づけである。ここでは「辺境」は、

「自前の文化的なスタンダードを築く代わりに、中心のスタンダードを変形させて生き延びてきた地域」と定義されている（8頁）。このような意味での辺境性は、日本文化論においてたびたび取り上げられてきたが、旧英国植民地として東洋文明と西洋文明を混淆させる能力が強調されてきた香港についても同様であった。例えば香港の作家・陳冠中は「方法としての香港人」と題された著名なエッセイの中で「香港はとっくにオリジナルな風味を失い、ただ交雑だけがあるが、この交雑こそが香港の正当な風味となった」と書いている（陳, 2007:47頁）。主流の広東文化への強い同化圧力や、かつて華人世界に対して発揮した文化的影響力を思えば、実態としての香港社会がどれほど多元的・辺境的であったかは疑問が残るものの、混淆性・交雑性は返還前後を問わず香港文化を語る常套句になっている。その意味で、香港には、日本について指摘されてきたのと同様な、「ハイブリディズム」（岩渕, 2016）、すなわち自己認識としての混淆論の存在を認めることができる。しかし既存の日本辺境論の多くは、往々にして日本特殊論に終始し「他の辺境に対してほとんど関心を示さない」（8頁）ものであったため、これまで香港との類似については十分に取り上げられてこなかった。

本書が示す日本と香港の類似点は、この「辺境」というやや抽象的な位置づけにとどまらない。福嶋が述べるように、戦後の日本と香港は「大衆文化がきわめて強 [い]」という点でもよく似ており、ポピュラー文化の発展において「お互いに影響を与えあって」（9頁）きた。戦後の東アジアにおいて、日本文化の消費に対して制度的障害をほとんど持たない貴重な社会であった香港は、日本のポピュラー文化の発展にとって重要な市場あるいはパートナーであった。日本でかつてブルース・リーやジャッキー・チェンら香港のスターたちの主演映画がヒットした一方で、香港においては80年代以降、日本のスター歌手がほぼリアルタイムに消費され、多くのヒットソングがカバーされている。

こうした日本文化の消費は、昨今の香港における抗議運動にも影響を与えている。福嶋は、香港でデモに参加する若者たちについて、「ストリートに出るオタク」（168頁）と形容しているが、実際に彼らの使用するスローガンやシンボルの中には、しばしばポピュラー文化からの引用が含まれる（小栗, 2019）。その中には、雨傘運動時に漫画『進撃の巨人』が中国化への抵抗の比喩として用いられたように、日本のサブカルチャーを改変したものも見られる。香港の若者の「本音」は、時に、日本の消費文化を媒介として表現されているのである。

しかし反対に、日本における香港への文化的関心は、返還前後のブームを最後にほとんど絶たれてしまったように思う。張も本書において「日本の文化、特にサブカルについて、香港人の若者世代はわりと多くのことを知っています。でも、それとは逆に、日本人は香港のみならず東アジアの文化から疎外されているのではないのでしょうか」（188頁）と指摘しているが、まさにその通りだろう。香港の若者が日々新しい日本文化を消費し、政治的活動への二次利用すらしている一方で、多くの日本人がイメージする「香港人」は、未だにジャッキー・チェンやアグネス・チャンのままである。

張は、上の引用を含む書簡に、「話したいことが無数にあるようだけれど、残念ながら私には分からない」という長いタイトルをつけている。これは、香港の1990年のヒット曲『李香蘭』の歌詞の一節「卻像有無數說話 可惜我聽不懂」（無数の言葉があるようだけれど、私は聞いても理解できない）から取られたものである。この『李香蘭』は、香港で有数の人気を誇る日本人歌手・玉置浩二の『行かないで』の広東語カバーであり、90年代に香港芸能界「四大天王」の1人として日本でも一定の人気を得ていた張学友（ジャッキー・チェン）が歌った。日中の間を生きた李香蘭を題材にしてい

ることを含め、まさにかつての香港と日本の文化的な交流を象徴する一曲だろう。

この歌詞の一節は、今の日本と香港の関係を考える上でも示唆的に思える。香港の情勢について日本で耳にする機会が増えた昨今、香港の人々に何やら多くの「話したいこと」があるらしいことは、多くの人に伝わっているはずである。しかし、香港の社会や文化に注目することを忘れてしまって久しい私たちは、彼らの言葉の本当の意味をしっかりと「聞いて理解」できているのだろうか。香港を日本の「鏡像的存在」（46頁）として取り上げ、雨傘運動以降の情勢について率直に語る本書は、いま私たちが、失われたパートナーの声に、再び真摯に耳を傾けるための案内役に最適な一冊である。

参考文献

岩渕功一（2016）『トランスナショナル・ジャパン：ポピュラー文化がアジアをひらく』岩波現代文庫。

小栗宏太（2019）「香港デモの記号学：パロディ、広東語、ポップカルチャー」倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層：「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』東京外国語大学出版会，289-295頁。

チン，アナ（2019）『マツタケ：不確定な時代を生きる術』赤嶺淳訳，みすず書房。

陳冠中（2007）『我這一代香港人』Oxford University Press。

Leung, H. H., 2008, *Undercurrents: Queer Culture and Postcolonial Hong Kong*, Hong Kong: Hong Kong University Press.